

デジタルアーカイブ – 21世紀へ持っていくもの –
プライベートライフからみた文化的遺産（Heritage）のデジタル化
糸魚川幸宏
日本ユニシス(株)広報部
E-mail : itoigawa@dp.u-netsurf.ne.jp Tel&Fax:045-972-2364

本論文では文化的遺産が歴史的に形成されてくることに個人が大きな役割を果たしていることに着目、インターネット文化における個人の有効なホームページにつき考察する。著者はコンテンツ制作への地域文化の強い影響、海外からのコンテンツ入手に始まる新しい創造的コンテンツの制作につき事例研究を行なった。

Consideration for Heritage and Digital Content in private life

Yukihiro Itoigawa
Nihon Unisys Ltd., Corporation Communication

The author considered about personalized digital use in photographs and drawing area. In cross culture communication excellent digital products had accepted from abroad and were used for new artistic products. Tohoku area in Japan has impressive power to promote multi-media culture. Private home pages have power to promote new culture and memorized products will be stocked and have chances to be heritage in future.

1. 研究の目的

日常生活における文化的な産物に関するデジタル化の必要性を考えてみた。具体的には耐久性、劣化性から個人的文化資産は年々減る傾向にある（紙製の日記、博士論文、写真等）。手許にあるものをデジタル化する必要性を具体的に考察し、デジタル化し有益になったことへの評価を行なう。ホームページにおける文化性を分析、文化とは個別に活用され意味を持つと考えた。歴史的遺産も個人的活用がデジタル化により身近に運用できるメリットを出せるということ実証する立場から今後の技術的運用を展望した。

2. 調査

歴史的事実、地域文化的な産物を掲載したホームページについて論証を行なった。調査は平成4年10月から日本心理学会、東海心理学会、情報処理学会などの著者の論文データ収集において意識的に行なってきた。電子メール、FAXなどの記述データは200人収集された（one to one コミュニケーション）。絵画を中心とした文化論については大阪、名古屋、東京の古美術商、画廊経営者の意見を有効に活用した。

3. 家庭記録、芸術創作記録のデジタル保存と現状での課題

児童期からの生育記録、会社、情報処理学会などでお会いする方の個人ホームページは折りにふれ拝見している。人によっては児童の頃からの写真がきれいにインターネット上に保管されている。著者が考え

たことはこうした写真保存は生育された時代の差があるが、なかなかできることではないということである。また、注目する研究者の研究歴を調べたい人には将来、有効な情報源になる。日常において大学時代の教授の通夜で学生時代に教授と一緒に写真を撮ってくれた人に再会し、パソコン用にネガを借りることを期待してもネガが入手できることはない。父母の遺影のネガにしても同様である。保存者にネガ検索を依頼しても時間がかかるので、数十年前に焼いた写真が古くなっても新鮮に焼き直すことはむつかしい。

コミュニティでの芸術作品のデジタル保存

ネットコミュニティの特徴は技術的情報交換と地域密着の教養、リフレッシュ活動と考えられるが、自己の創作する絵画をインターネットのギャラリーに展示している人がいる。多摩パソコンクラブの方の作品は四季の感覚や、モデル論などのコンテンツが用意されている（インターネット上の個人画廊、佐伯良四氏CG作品他の展示 <http://www.tama.or.jp/~saeki/>）。こうしたホームページは地域社会での活動に足を運び、直接的対話で得た情報で知ることができる。

ところで文化性ということで考えた場合、多摩ニュータウンがどのような歴史的背景を背負っているかは、そこに住んでいない人間には分かりにくい。三鷹、近藤勇、日野、土方歳三という身近な歴史的人物が思い出されることもない。都市にある文化ホールで永井路子さんの講演を聞き、歴史的遺跡が近くにあったということが記憶にある位である。情報処理学会でお会いした人が主導する多摩パソコンクラブに参加し始めた時、歴史文化的背景を理解しコミュニティに行かないと本当のところのネットコミュニティ活動ができないような気がする。

インターネットでの出会いによる文化的産物の愛用

自己制作ホームページはかなり個性的な人でないと制作されないとというのが最近までの本調査結果である。このホームページ発信で問題になるのは、単に写真があれば良いというものでなく、あるレベル以上は越えていないと楽しく見られない、コラージュとして活用できないということである。ひとこと日記のちいさな写真日記（<http://tadaboh.hoops.ne.jp/>）は購読者2000万人のメールマガジンで無料入手できる。こうした写真は名刺交換などで知られる海外のホームページの写真ギャラリーでも作家の許可で入手、利用できる。

年賀状のイラストなどでよく活用したのは、ノルウェーの心理学者がリンクしていた山岳写真家の写真集である。こうした写真はクロス・カルチャー的考察にも役立ち、コラージュ的な創作でパソコン文化を

止揚していくものと考えられる。国際的会議で写真を撮ったことによりone to one のコミュニケーションが継続される理由にもなる。逆に撮影された写真を受信し、その方のデジタル写真の保存管理の仕方に情報処理の専門家のノーハウを感じ、その後活用したいと思うこともある。つまり、情報処理技術は習得すればかなりの文化的活動ができるなどを理解させられる。絵画、写真はホームページ、メール送信で利用できるが、一時的活用から保存、再度の利用、記録化という過程をたどるが自然と作品に対する評価がabsoluteに行なわれている。多くのホームペ

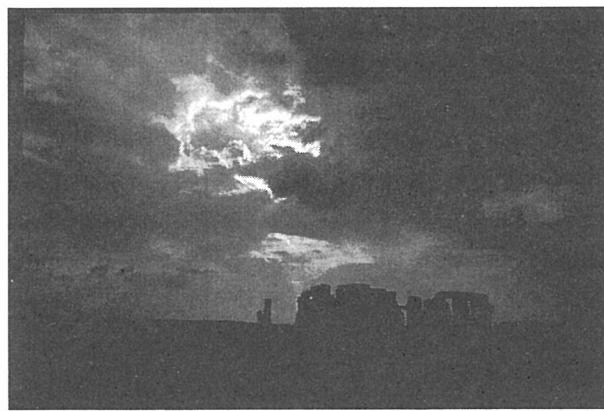


図1：Johnasan Carr の写真作品

ージがあるが、「他に？」と類似のホームページを探し、比較評価して使うことはない。最初に来たものとの出会いの感覚で評価が行なわれる。つまり、個人保存であっても文化性芸術性が極めて厳格に規定され個人保存されていると考えられる。家庭用パソコンであれば記憶容量が限定され、ある時期に保存記録を削除する必要性があり、個人に保存される絵画、写真的文化資産は減少、自然淘汰された良いものが残っていくことになる。

画像は年賀メールで新年に2・3件受けてきている。牛年の年賀が最初であったが、画像のレベルとして



は高いものであると言えずメールとして保存しているが特に折りにふれ見ているわけではない。既成の年賀のためのソフトウェアに用意されたイラストは良いものではなく、自分で写真を撮りコラージュするか、プロの作品を許可を取り使用するしかない。年賀をあるレベルに仕上げるにはかなりの労力を要するが、年賀創作の突破口になったのはエジプトのカイロからの Happy New year card の受信である。

図2：創作を刺激したカイロからの年賀メール

年賀創作が暗礁に乗り上げていた時に受信し、此の方にこちらも年賀送信しようと意欲を燃やしたものである。単に年賀創作ということに限定されるものでなく研究、芸術の分野でも活動を止揚する要因になると考える。コンテンツは受信者にあるレベルを感じさせ保存され引き継がれることが必要と思う。

研究者との出会ったあとの交流、論文などの学術資産の受信、保存の生起事例（8人の心理学者）

Item Name	From- Meeting Place	Content	Via	Personal Heritage	Evaluation
Susan T. Fiske	USA-Tukuba	Articles	E-mail、 Web		References
Bjarne Fjeldsenden	Norway-Chiba	Survey	E-mail、 Web	Photograph	Co-work
Peter Schmuk	Germany- Stockholm	Articles	E-mail、 Web		
Elfriede Ederer	Austria- Stockholm	Articles	E-mail、 Web		Co-work
Manuela Paechter	Germany- Stockholm	Articles	E-mail、 Web		References
Jean Retschitzki	Switzerland- Stockholm	Articles	E-mail、 Web		Xerox content
Paul.W.Clement	USA-Stockholm	Articles	Air mail		Research Following
Ulla Kinnunen	Finland- Stockholm	Articles	E-mail		References

表1：研究者との出会いによる文化的交流と保存される学術的資産

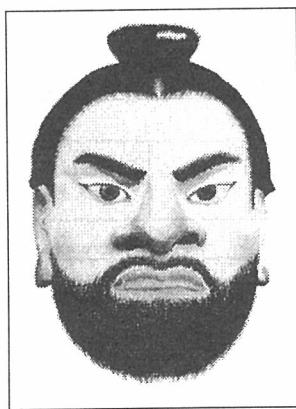
人と交流することが個人レベルでのデジタル資産の向上になり、よりレベルの高い止揚が行われる力となると考えられる。私的なレベルでカイロからのカードから刺激を受けたが、芸術的な傾向というものは世界の地域、国家ではっきりした特徴を示すものと考えられる。スウェーデンで行われた国際心理学会議のポスター発表で著者が芸術的色彩から注目したのは、スペイン、ポルトガル、ベネズエラ、アルゼンティン、フランスという国のプレゼンテーションであった。ビジュアルなものに思索、文章を転換することは常に考えられていることであるが、一目瞭然に文化的差異が見られた国際的会議であった。ピカソを生んだ文化圏というものが強く感じられる。逆に自分の生育した文化圏（著者の場合、信州松本、岐阜東濃、名古屋、京都）を考察していくば、かなりの文化的遺産に出会うことができる。岐阜県中津川に幕末国学者がいたということであり、画家前田青邨は「郷土の先覚」という作品を描いている。郷土出身の画家であっても作品を見るのは美術館、デパートでの展覧会、画廊などである。没後、前田青邨の記念館が中津川市苗木にできた。そこで注目し情報処理のヒューマン・コンピュータ・インターフェースの分野で再考したいのは前田の絵を描いていくプロセスである。ビデオにより「流し込み」などの技法を見ることができるが、芸術的技能の分析としてさらにデータを収集していくことが課題となる。

4 ローカル・アクトによる文化的産物

4-1. インターネットの地域文化的産物の評価

a. 歴史上人物アテルイの顔

<http://www.pref.iwate.jp/~hp2518/toppage/report/ateruiimage.html>



作成方法等、鹿島神宮「悪路王首像」と、アテルイの没後60年後（西暦862年）に作成されたといわれる黒石寺「薬師如来坐像」をベースとして、CGの手法により作成された。地域の意見を反映させるため、アテルイをはじめとする胆江地域の歴史と文化についての研究活動を行っている民間団体「延暦八年の会」に委託された。CGを専門分野とする「岩手大学工学部情報工学科千葉則茂教授」の技術指導により、株式会社ジェーエフピーが画像制作を行った。水沢地方振興局のほか、アテルイの顕彰活動を行っている民間団体の代表、報道関係者代表、管内市町村の代表等が選考した。

図4：アテルイの像

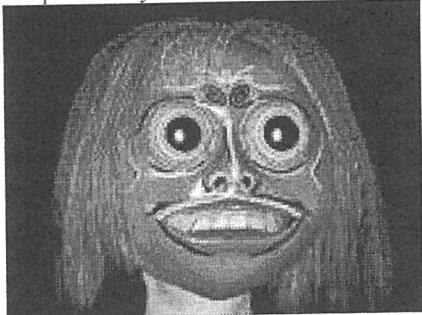
鑑賞評価、作られた顔をじっと見ているだけで、次第に体に力が湧いてくるような、不思議な気持ちがした。ディジタルで作られている画像と認識しつつも、見続いているとそのように気持ちが変化するところが重要と感じた。

技術的評価、アテルイの顔に興味がある。特に前九年後三年の役以前の奥州をしのぶのによいし、土地の人には地域アイデンティティを確立するのによい素材と思う。アテルイがこういう顔であったというために制作の手順をしっかりと、画像として処理過程を説明しておくとよい。そうでないといい加減なといわれてしまう。明治神宮に歴代天皇の肖像画が陳列されている。アテルイの場合、出版、インターネット・コンテンツとして地元の熱心な活動で今後、歴史的役割が広く再考されていく可能性が強い。インターネット時代の地域文化の飛び火で歴史的資産の活用は広がる。

b. なまはげ仮面などからなるごんぼ CLUB

(制作者死去、有志がホームページを管理)

<http://www.youkari.com/tadazo/profile/index.html>



制作環境

Power Macintosh G3 266/DT : Mac OS 9.0 :

RAM288MB : HDD 20GB : Sony Multiscan17GS Shade personal R3/Animation Master 7.1J/Photoshop/Illustrator /Premiere 等。

保管者の意見、HPは地域の仲間達が様々なコンテンツで使用し生かしていく。デジタル保存は文化的に必要と思う。単なる学術的な意味のものが余りにも多い。もっと面白いものであるべきと考える。面白くないものはきっとそのまま劣化していく

図5：ごんぼクラブのなまはげ仮面

ものと思う。この作品のような（もう少しなまはげの裏づけ調査が必要であるが）いつ見ても笑える、面白いといったものが意味づけ、価値評価をされ保存していくことが重要と考える。

芸術愛好家の評価、残された映像ファイルが面白いだけに、作者本人が亡くなられたことは非常に残念です。作者にいろんななかたちで出会った多くの人の思いがこのページを残そうという方向に導いたのだと思う。作品はデジタルなもので劣化せずに残る。ネット社会の可能性としてまた新たな一面に気付かされる思いがする。亡くなられた人のページが他人である共感者によってそのままの形で残されている例を他にも知っているが、やはり、胸にグッと来るものがある。ネットは誰によるものであれ、確実に何かを伝え、そして共感者を生んでいるのだと思う。

民俗学研究者の意見、きれいな整ったホームページとは思うが内容は期待した面白さを感じない。私の知りたい岩手の魅力が伝わってこない。内容は平板で作者の個性が見えない。様式の単純さは長所と思うが、単純な深みが出ればと思う。

c. マルチメディアへの発展

ある作品を残し夭折した芸術家は歴史的に評価が高いことがある。ごんぼCLUBの作者も地元の人達が業績を引き継ぎ新しい方向を求めていいる内にインターネット放送の中でアニメーションとして使われていくことになる。インターネット放送局「JENGO-TV JAPAN」がそれで、（<http://jengo-tv.com/>）エンターテイメント、ごんぼCLUBを活用、りんへい友達キャラ募集として対話型の創作刺激を与えている。「（りんへいという画像に）お友達または敵をつくってあげましょう。ごんぼCLUBの映像をみて、あなたのアイディアを送ってください。画像は動画でも静止画でも鉛筆書きでもいいのですがりんへいとどんな関係でどういうストーリーになってほしいか希望があるとなおいいです」と呼びかけている。岩手と津軽を発信源で方言をむき出しに呼びかけている。運営している人の意見では「取材はいまのところ4件ありました。朝日新聞岩手版で取材、IBCいわて大陸 方言の番組で放映、毎日新聞毎週日曜発行のくりくり新聞取材、広報花巻取材の4件。視聴率は一日60-120、平均で100切るくらいですか。（ゴルフスコアみたいですね）面白いといってトップページにリンクをはってくれる人がいたり励ましのメールも結構いただいています。開設してまだ1ヶ月ちょっとにしてはまあまあ反応いいのではないでしょうか」という状況である。このことは単に亡くなった人の業績の受け継ぎ、飛躍という美談でなく、東北の地域文化の力と考えられる。一人のリーダーの指導でなく、何人かの熱心なリーダーの活動が根強い地域文化を盛り立てているという現実がある。

d. 東北地域へのパーソナライズ化された文化考察

東北地域への興味と関心は歌で始まっている面もある。「北帰行」、「北へ」などの北の方向を目指す歌は感情をかりててある面がある。名古屋市長が仙台に比べて当所ソングがないと各国の市長が集まった国際会議で述べたことがある。川が名古屋に少ないことも歌ができにくい面があるかも知れない。青葉城という遺跡があること、岐阜県の近隣出身の島崎藤村が仙台にいたことなどもこの地域に親しみを持った理由である。マルチメディアの時代になり、推進者の紹介でメーリングリストに入れていただき熱い活動の状況を毎日のメールで知ることができるようになり、東北への親しみは倍増した。制作されるマルチメディア作品が驚きを与える、好みに合うことも大きな理由である。

この背景をさらに歴史的事実で検証してみると、平泉に義経最後に地を発見したことでも大きな親しみを持つ理由である。こうして義経最後の地に関する歴史的遺産のデジタル化を発想するに至った。岐阜に関ヶ原あり、合戦模様などがマルチメディア作品になっている。岐阜のマルチメディア工房は信長の時代の長良川を思い出させる湊町あった。風景、見晴らし、川の流れ、寺、音楽、祭りの模様、観光に来る人の動き・表情等を組み立て歴史的遺産の環境を身近にしたいという動機はここにある。商品を開発される方の企画・立案・シナリオ・プロデュース作品はヴァーチャル・リアリティによる歴史合戦の再現～関ヶ原の戦い～ 関ヶ原の戦いの21時間を、「距離感の追体験」、「密集の描写」、「天候・気候の再現」、「時間経過の実感」等を通じ、史実により近く再現できるコンテンツを制作するというものであった。民俗学研究家は義経最後の地の風景・川・音楽に興味を持つ。

4-2 東海地方への評価と愛知県出身者のホームページ活用

インターネットでの芸術愛好家(福岡の人、 <http://www.mnet.ne.jp/~emonyama/>)：織田信長に思いを寄せる時、岐阜や名古屋の一帯はかなりのパワーを持った地であることを認めざるを得ない。具体的な文化と言うよりも、「場」の持つ力というものだと思う。インターネットで現代人の生活スタイルは大きく変わっていく。文化面では、版権が切れて入手困難な著作物の一部をネットを通して誰でも読むことが可能になっている。無名の人がネットで作品を発表したりすることで、思いがけない才能が発掘されている。また、いままであった文化を再発見、あるいは再認識させる意味でも、インターネットは大きく貢献するはずだ。国内でも各県の特徴により影響、反発が存在しそれが良く働けば新しいインターネット文化を生んでいくことになる。

飲み仲間を募る人（愛知県出身）の紀行文的電子メール文と円空のホームページへのリンク：

抜粋、土曜日はJR茨木駅行きのバスに乗り、京都発8:33の特急を待つ間に、乗る特急を入れた絵をデッサンし、乗ってから色を塗った。高山駅に着いて、まず、荷物を予約のビジネスホテルに預け、レンタルサイクルの自転車屋を教えて貰い、1台借りた。天気が保ちそうなので、赤瀬川原平、山下裕二「日本美術応援団」 <http://bpstore.nikkeibp.co.jp/item/main/148222416370.html> で、円空の彫刻 <http://www.pref.gifu.jp/s11146/enku/> があったので、高山市北となりの丹生川村(ニュカムラ)の「円空仏展示館」のある「千光寺」に行こうと、駅前の案内所で、丹生川村の観光案内紙を貰って、国道148号線を走った。丹生川村の役場前を左折し「千光寺」の旗が掲げてある、寺域の道に入ると、変速機が付いていないので、歩く他はありません。中腹で、雨が降ってきて傘をさして歩く内、特製の帽子(62cm)を飛ばしたようです。「円空仏展示館」横の売店で団子とお茶をいただいた。円空の彫刻は、この寺に滞在したため、立木に彫った二体を移転した物他計63体あるとのことでした。写真集を記念に求めた。（車での参詣をお奨めします）下りは雨が止んで、あっと言う間に県道に降りた。なくした帽子を再度作って貰うため、三女の義母にもお土産と、川をくだり「飛騨高原ハム」の国府町三川の小工場を捜した。2人に聞いてたどり着き、「案内札が出ていないので、迷って来た」と苦情を言って、ベーコン、ロースハムを各2個購入して、4時半なので、「高山の宿に帰るから、大和運輸高山営業所に持ち込む」と言ったら、輸送用の箱と保冷剤

をサービスしてくれた。

紀行文は多摩コミュニティのパソコンクラブでも1年に二、三がメーリンリストでの連絡で見られるが、インターネット上の新しい文化的な産物として今後の期待と正しい保存が個人のレベルで望まれる。引用した小旅行は著者として興味を引いたので本論文に挿入したものである。保存しておきたいというのも文化資産を生み出していく誘因と考える。個人の特徴はその文章に一番現れるが、文章は家族、教育、風土のまじりあった芸術的創作の基盤になるとえた。すでに電子メールの保存が文化資産蓄積と見なすことができる。

5. インターネットの個人の文化的な産物

5-1. 経営工学研究者のホームページ、(<http://www.asahi-net.or.jp/~RI2T-TKUC/> アメリカ旅行記が掲載、リンクも興味を引くホームページを呼べるという特徴あり)

自己の研究成果の保存用バックアップとして制作、5人ほどの SMALLER GROUP COMMUNICATION に使っているホームページで自家製のゲームがダウンロードできる（パソコン雑誌の賞を受賞したことがある）。LZH で圧縮、それでも 5.79MB ある。ダウンロード完了まで、下手すると 30 分位かかる。Windows95、98、NT、2000 で動く。

音楽に関する意見、文化的な資産をデジタルで残すことは、非常に良いことだ。例えば僕は、携帯音楽機器を MD から MP3 ウォークマンに切り替えたが、MD だと、一度 MD に録音してしまうと、なかなか取替えが難しいので、新しい曲は新しい曲だけで MD に記録してしまい、自然と新しい曲ばかりを聴くことになる。MP3 データは、古い曲も新しい曲も、パソコンで好きに詰め替えができる。MP3 ウォークマンにして、僕は古い曲を聴くことがずっと多くなった。全然ヒットせず、歌った本人でさえ忘れているような、僕好みにはぴったりした曲を繰り返し聴く。文化的な資産をデジタルで残しておけば、作った本人ですら忘れた頃でも、誰かが、熱心に搜すということが起こり得る。

個人的研究へのメリットを発見、音楽を装丁するところまでホームページ制作が進んできている。特に多くの人の参加を求めておらず、5人ほどのメールによる反応発信者との応答を楽しんでいる。今後の課題が経営工学研究者によってどのように消化されていくか注目される。

5-2. 個人ベースの文学的遺産の保存

① 芭蕉に関するホームページでの個人ホームページの発見

a.大学の推進するホームページ、規模も大きく技術的貢献を学会で展示などしている。

<http://133.67.71.133/>

b.個人制作のもの、芭蕉研究の発端などが書かれ分かりやすく画像も有益である。

<http://www.bashouan.com/index.htm>

<http://www.ese.yamanashi.ac.jp/~itoyo/basho/basho.htm>

② 宮澤賢治のホームページ、個人で制作されたもの。宮澤賢治を知る上で便利である

<http://morioka-shirayuri.morioka.iwate.jp/kenji/kenji.html>

5-3. 著者の課題

高雄神護寺の歴史的遺産から地中に眠る和氣一族の歴史的再来をデジタルに実現すること。

神護寺は5月の緑、11月の紅葉で知られる。京都市内からバスで50分ほどである。関西在住でないとなかなか行きにくい。この論文をテーマとしてエントリーしてから神護寺へ行く機会があった。何が個人的資産として保存したいのか6時間の散策、思索のあと考えてみた。自分が神護寺で何を得てデジタル資産として身近に活用したいかを気づいたことから列挙してみた。決して京都大学図書館の維新史資料のデジタル化のように寺に保存されている歴史的遺産をパーソナルに得ることではない。神護寺の環境はバ

ス停から坂を下り川の橋を渡り、寺の門まで上がる道を歩くことがまず第一の過程である。次いで入場料を払い寺の敷地に入り建築物を見る環境へと足を進めることになる。そこにあるのはマグリッドの「光の帝国」のような静寂と緑、空と樹木との醸し出すもやのような美である。奥にある和気清麻呂の墓所でも人と自然の調和が何百年も人手により保存、環境化されて来たことが理解できる。林をさす日の光、紅葉を突き通す日の光、静寂、こうしたものが自分の環境として保存したいのである。バーチャルでもなく自然と人間の融合による精神空間も求めているのである。

大英博物館の日本コーナーでは道元の時間論を説明、具体的時計の陳列を徳川時代という過去の歴史に溯り行なっている。神護寺を建てた清麻呂の後は文覚上人により引き継がれていき、文覚上人は源頼朝に平家を討つことを進める。頼朝の「平家」という書は5月の展示で見ることが可能であった。単に書をデジタル・ライブラリーで見るだけでなく、タイムトンネルのようなバーチャルな世界を神護寺の個人的デジタル資産化として考えているのである。夢のようなことで実現可能性を否定する方もあると思うが、「情報とその装置」の時代、雲つかむとシステムの時代来形容した時代から時間、自然のデジタル化の発想、具現化を現実に試行してみたい。

6. 考察と今後の課題

①個人の行なうホームページ制作、デジタル資産化は事例でみる限りかなりの規模まで可能である。文化保存と個人の自由な制作活動が伝承、エンハンスの過程でどのような壁を越えねばならないか、事例のホームページ等から論証していく。

②CG、Animationの日本と海外作品との比較考証を行なう。具体的にはフィンランドのアニメーション作品と東北のマルチメディア作品との類似、比較考察を行なう。

③現在見逃すことのできない問題として日本語のみのホームページが海外で何も見られないという現実を打破することがある。これまで制作してきたホームページがここで引き継がれることもなく死蔵されていくことが多く見られる可能性がある。

7. ホームページのAPPENDIX

①著者の絵画保存ホームページ

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~itoigawa/Art.html>

②WWW9、Culture Trackでのプレゼンテーションのホームページ

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~itoigawa/Event.html>

③本村健太さんのホームページ

<http://fen.edu.iwate-u.ac.jp/~bijutsu/motomura.html> (English)

④山崎文子さんのホームページ

<http://www.rnac.ne.jp/~micos/> (Japanese)

⑤岩手大学の千葉則茂教授のホームページ

<http://www-cg.cis.iwate-u.ac.jp/> English

⑥フィンランドのアニメーション作品のホームページ

Dream One (www.dreamone.com)

⑦M.Graeber Jordan, Briefings to Smaller Groups

<http://www.gjordan.com/briefings.html>